

NPO 法人マザーズライフサポーターの痛快な歩みが意味するもの

—— 母たちは、停滞する既存の社会制度を尻目に、
自分たちの望む社会を作り始めた ——

What the MOTHERS' LIFE SUPPORTERS, Registered NPO
and the Incisive Performance Would Mean in This Society
— Mothers have at Last Started to Create Their New Social Systems Beyond
the Lazy Society that Would Not Solve Their Problems —

川村 潤子¹

Junko KAWAMURA

原田 忠直²

Tadanao HARATA

要 旨

本論は、「子ども」を保育園などに預けることなく、母親たちの相互扶助システムのもと、新たな働き方を模索するNPO法人マザーズライフサポーターの成立経緯や諸活動を紹介する。その上で、マザーズライフサポーターの運営方法（とくに経済活動）と中国の「包」的営みとの類似性から、その活動の社会的な意義を問い、「家族」にいかなる影響を与えるのかを考察する。

キーワード：母親の孤立、夫の孤立、相互扶助システム、「包」的営み

はじめに

NPO法人マザーズライフサポーターの代表を務める伊藤理恵（旧姓山北）は、私（原田）の教え子である。もともと、ゼミ生ではなく、直接授業で教えたこともない。私が毎年企画していた海外研修で中国各地を巡り、知多半島の外国人用の観光マップ作成プロジェクトに参加した彼女にadobeのイラストレーターとフォトショップのソフトを渡したこと、この2点だけが大学における接点である。しかし、学外では、酒豪の彼女には幾度も潰された。卒業後、彼女は地元の三重に戻り広告代理店に就職し、仕事で知り合った男性と結婚、そして出産。子育てに忙しいだろうと思い遠慮し、宴席の場もめっきり減った。ただ、数年前、「近所の母親たちと何かを始めたらしい」と伝え聞いたが、悩み相談の類を一つでも作ったのであろうと勝手に思い込み聞き

1 愛知大学大学院中国研究科中国研究専攻修士課程

2 日本福祉大学経済学部准教授

流した。そのようなものならば、どこにでもあるし、ましてや中国経済を研究テーマとする私にとって、好奇心が刺激されることはなかった。

ところが、2017年5月、担当する「キャリア開発Ⅱ」の授業にゲスト講師として招き、彼女がマザーズライフサポーターの活動を詳細に語り始めると目から鱗が落ちた。そもそもこの授業は、社会で活躍する卒業生たちの生き様を学生に伝え、少しでも刺激を受けてもらいたいという主旨であるが、その日に限って言えば、学生以上に私は衝撃を受け興奮した。

その理由を簡潔に述べれば、私が、中国経済・社会の一つの特徴として捉えている「包」（請負制度を指す）をマザーズライフサポーターの運営（とくに経済活動）に発見したからである。経済活動において上下関係を排除し、平等と自由を再構成しつづける「包」という一つの経済システムが、よもや日本社会で成立しているとは想定外であった。もちろん、「包」＝「中国的なるもの」という図式を絶対視していたわけではない。それゆえ、日本でも「包」的な営みが行われているのならば、そのシステムの「普遍性」という新たな研究の方向性を切り開くのではないか。また、女性たちが、「包」的な方法で社会に根を張っているのであれば、少々窮屈さが漂い始めた日本社会（あるいは男社会と言い換えてもよいであろう）へのアンチテーゼを含むとともに、新たな経済・社会のありかたを指し示すことになるのではないだろうか、と彼女の話聞きながら思考は飛躍した。このような考えが頭のなかを駆け巡り始めると、マザーズライフサポーターについて調査を進めてみたいという思いを抑えることができなくなった。

しかし、マザーズライフサポーターについて語ることは、同時に、日本社会における女性についての理解が十分でなければならない。ところが、家庭、仕事、コミュニティなどで、女性たちが何を考え、何を求めているのか、皆目見当もつかないというのが、正直なところである。実際、今回の調査においても諸活動に参加する女性たちが、「なかなか夫の理解を得られない」、「私が外で活き活きと働いていると夫は嫉妬する」などと苦言を呈しているのを聞き、私は思わずそのような「夫」たちには「“小さいね”と反論すれば、“黙るでしょう”」と得意げに言い放った。すると私を取り囲む女性たちは失笑し「そんなことが言えるならば、苦労しない」と白けた目を向けられた。彼女たちの笑いには、「何もわかっていない」、「そういうあなたも決して大きくはないでしょう」という意味が含まれていたことは言うまでもない。このような無理解さを平気で露呈する私が、単独で女性をテーマにして書き進めることはできない。それゆえ、愛知大学中国研究科に籍を置く川村潤子と共同で調査・研究を進めた。もっとも、共同研究という聞こえは良いが、マザーズライフサポーターの活動内容の紹介、参加する女性たちについての分析など、いわゆる本稿の主要な部分はすべて彼女によるものである。言い換えれば、私は、ただ個人的に興味を抱いた「包」的な営みについての分析を担当したに過ぎない。なお、川村を選んだ理由は、就業経験を持ち、さらに「包」についても理解があるためである。

さて、本稿の構成と各章の目的は次の通りである。第1章では大まかにマザーズライフサポーターの成立の経緯や活動内容を紹介し、その活動にはどのような意義があるのかを考察する。第2章では活動に参加する女性たちの意識、夫婦間の状況などを紹介し、母親の孤立と夫の孤立を

浮き彫りにしつつ、新たな女性の社会進出を提示するマザーズライフサポーターの役割や課題について分析する。以上の第1章と第2章は川村が担当した。そして、第3章では、「包」的営みを簡単に紹介し、マザーズライフサポーターとの類似性を検討し、理論的背景の繋がりから日本社会に与えるインパクトについて推測する。

第1章 概要と歴史

NPO法人マザーズライフサポーターは、2013年8月、代表を務める伊藤理恵とその知人たちによって設立された。その立ち上げメンバーはわずか6名に過ぎない（2週間後に1人が抜けたため、実質的な立ち上げは5名である）。ところが、その後、後述するように急速に主婦たちから支持され、2017年7月現在、約300名の女性が参加している（このうち中核的なスタッフとして雇用関係にあるのは25名）。ただ、設立当初、立ち上げメンバーは、現在の姿を想定していたわけではない。

マザーズライフサポーターの歴史を簡単に振り返れば、月に2回、立ち上げメンバーが、鈴鹿市内のコミュニティセンターで子育てを学ぶためにワークショップを行ったことが、その始まりである。彼女たちをお互いに引き寄せた要因は「子育て」、それも「子育てに関する悩み」という共通点を抱えていたからにほかならない。代表の伊藤理恵は三重県出身であるが、それ以外のメンバーは、大阪、横浜、宮崎、東京出身者であり、夫の仕事の都合で鈴鹿市に引っ越してきた、いわゆるニュー・カマーであった。見知らぬ地で、始めての子育てに戸惑っていた彼女たちは、悩み深き日々を送っていた。多くの主婦がそうであるように彼女たちも、育児本やネット上、子育てサークルに参加するなどして「正しい子育てとは何か？」ということを真剣に探る毎日を過ごしていた。しかし、そうした子育てについて探れば探るほど隘路にはまり込み、なかなか正解を見つけることはできずいたという。さらに、苦しみの中で、傍らで戯れる子どもを可愛いと感じられなくなり、「どうして、子どもを可愛いと思えないのだろう」という自問を繰り返し、自信を失いかけた。見知らぬ土地で、話し相手も少ない。その上、世間は決して「子連れ」に対して寛容とは言えない。たとえば、ベビーカーを押しながら電車に乗れば、周りから冷たい視線が浴びせられるという経験を持つ人は決して少なくないだろう。また、街中のお店に次のような張り紙が張られていることもある。“当店はボタンを主とした、小さく細かい商品を扱っております。お子様連れのお客様には以下の点をお守り頂きますよう、お願い申し上げます。商品・什器等の破損やお子様の怪我に繋がりますので、店内で走り回ったり、座り込んだり、大声で騒いだりしないようお願い致します。商品や什器などの破損については弁償頂きます。また、他のお客様へ迷惑となる行為はおやめください。お子様が誤飲・誤ってポケットにお入れにならないよう、またむやみに商品にお手を触れないよう、手をお繋ぎになるなどして、保護者の方はお子様から目を離さないでください。小さい店舗の為、ベビーカーは畳んでご来店ください”¹。このような配慮のない張り紙を前にすれば、思わず足はすくみ、背中を丸め家路につ

くしかない。いうまでもなく、この日本社会において、子どもと一緒に出かけることは、騒ぐ、壊す、汚す子どもに代わって「ごめんなさい」と頭を下げ続け、神経は擦り減り続けていくことになるのだ。

こうした少々疲れ果てた状況が、マザーズライフサポーターの出発点であった。ただし、互いに悩みを共鳴し励まし合うなかで、彼女たちが子育ての正解を見出したわけではない。子どもを持つことで母親が家庭に閉じ込められているという感覚、社会から孤立しながら悩んでいる自らの存在そのものに疑問を抱き始めるようになった。もちろん、この時点で、子どもを保育園に預け、社会と繋がるという解決策を選ぶことも可能だったはずである。しかし、彼女たちは、「孤立したなかでの子育て」という問題を個人的に解消することはなく、自分たち以外に苦しむ女性のために何かできないかと、その視野を広げ、その先に解決策をイメージし、それを実行していった。もちろん、彼女たちの前途は決して平坦ではなかったはずであるが、少なくともわずか数年で、その活動は形ある結果を残し、鈴鹿の地に根を張っていることを疑う者はいない。以下、マザーズライフサポーターの主な活動の内容を紹介したい。

第1に、nico mama (ニコママ) という育児フリーペーパーがある (写真1-1 参照)。三重県の中・北勢地域を範囲として、取材から編集までマザーズライフサポーターのメンバーによって作成されている。この育児情報誌 nico mama の狙いは、マザーズライフサポーターを設立するにあたって法人会員を集めることにあった。彼女たちは、その活動を開始するに当たり「夫」たちから協力を得ることはできなかった。冊子の作成に集中するため、一時的に子どもを託児サービスに預けようとしたのだが、その費用を「夫」に依頼すると、「その活動は金になるのか」と詰問され、託児費用の負担を拒まれてしまった。そのため、「夫」以外の協力者を社会のなかで探さなければならなくなった。さらに、協力費を集め「お金になる」という目に見える成果・結果が必要でもあった。少々うがった見方をすれば、「夫」に対して自分たちの実力を見せつけたいという意地のようなものが原動力であったかもしれない。しかし、「夫」の財布に依存することなく、協力者を社会に求めるという方法は、結果としてその後の成功に繋がっていく。もちろん、法人会員を探すことは簡単なことではなかった。子連れでも快く来店を許可してくれるお店、言い換えれば、「ごめんなさい」と幾度も頭を下げなくてもよいお店を中心に探したが、集



写真1-1

まった店舗はわずか6軒に過ぎなかった。nico mama の創刊号ではこの6軒のお店を紹介し、クーポン（割引）を付けて発行した。ところが、この6軒のお店にはクーポンを持った子連れの母親が続々と押し寄せ、予想以上の売上げが達成されたという。たとえば、掲載された焼肉屋では、当初、子どもへのサービスはそれほど充実していたわけではないが、子連れの来店者が増していくとともに、店内の本棚には絵本が次第に増えていき、今では子どもの遊び場としてのキッズコーナーまでが用意されるようになった。「子連れ」を対象とすれば顧客増に繋がるという類の噂は、瞬く間に広がるのであろう。現在、マザーズライフサポーターのスタッフが営業しなくても、法人会員や協力は続々集まるようになっていく。2017年7月現在、67件の法人会員と140店舗（協力店）が育児情報誌 nico mama に掲載されている。法人会員からの協力費はおおよそ年間120万円にのぼり、発行部数も3500部から5000部と増刷されている。また、母子手帳の配布と同時にこの育児情報誌 nico mama が配られ、この認知度は高まるとともに、子連れでも安心して街に出ることを助けるための貴重な情報誌の地位を確立しているといっても言い過ぎではない。

第2に、nico mama café（ニコママカフェ）という一つの空間がある（写真1-2～3・参照）。このカフェは、古い民家を改造して2013年10月に開設された（当初の家賃は月1万円であったが、現在は5万円）。このカフェの目的は、マザーズライフサポーターの事務所機能（あ



写真1-2



写真1-3



写真1-4

るいはスタッフの溜まり場」というだけではなく、主に次のような役割を備えている。カフェには、子連れの母親専用の託児サービスと仮眠室（リラクゼーション）がある（写真1-4・参照）。つまり、子どもとキッズスペースで「親子で遊ぶ」ことも可能であるとともに、少々疲れた母親には、子どもを保育スタッフに預け、「ママの自分時間」を仮眠室でのんびり過ごすこともできる。こうした2つの仕組みを持つカフェでは、年間利用者は延べ1000人を超す（2016年度実績）。また、このカフェ内にも、上述した協力者（協力企業）を発見することが可能である。たとえば、ティーパック、インスタントコーヒーなどは、企業から寄贈されたものである（写真1-5・参照）。企業からみれば、消費者としての母親に宣伝費をかけても問題ないということであろうし、後述するように母親や子どもたちの嗜好を知ることで品質向上、新商品開発などに繋がる貴重な情報を容易に入手することの旨味を見出しているといえよう。

第3に、smile（スマイル）という託児サービスがある（写真1-6・参照）。smileは主に4種類のサービスがあり、託児スタッフの自宅で子どもを預かるスマイル託児、利用者の自宅に託児スタッフを招き子どもの面倒をみるスマイルシッター、nico mama café内のキッズルームを利用した子どもの一時的預かり（スマイルルーム、写真1-7～8・参照）、イベント会場などの施設で複数の託児をする企業や個人事業主向けのスマイルシッターズがある。いずれも利用者と保育スタッフの都合に合わせた託児サービスが展開されている。smileの年間利用者（2016年度



写真1-5

日1000円未満 一時預かり

スマイル

ママと子ども両方の笑顔のために

スマイルシッターズ(団体)

イベントなどの催し、施設などで個人や個人店舗
を主催・共催する企業・店舗・団体、個人事業
主を対象に提供可能なサービス。団体・企業
契約も可能。専任スタッフの出張、出張
回数に依ります。

★ご利用料金(各回1時間単位の場合です)

利用料	¥6,000(800月以内)
出張料	¥1,000円
交通費	¥500(1回往復)

★送迎オプション

送迎オプション	1回¥1,000円
送迎回数	1回につき1,000円
送迎待ち時間	¥1,000円
送迎待ち時間	¥1,000円
送迎待ち時間	¥1,000円
送迎待ち時間	¥1,000円

スマイル★お申し込み料

団体や企業を窓口とする場合、スマイルシッターズ
が別途費用を請求いたします。

このサービスが初めてご利用の場合は、別途
お申し込み料を請求いたします。

★年費(団体契約) ¥5,000円

★ご利用時間(各回1時間単位の場合です)

利用料	¥6,000(800月以内)
-----	----------------

写真1-6



写真1-7



写真1-8

実績)は延べ300人である。

第4に、nico labo (ニコラボ) という託児付き仕事の斡旋サービスがある。もちろん、単なる人材派遣サービスとは異なる。企業や農家から提示される仕事の期間・必要とされる人数を調整し、同時に託児サービスも考慮されながら行う。たとえば、農家から白菜の収穫をnico laboに依頼されたとしよう。白菜の収穫をしてくれる母親を募集し、グループを作る。このグループは、白菜の収穫に行く班と託児をする班の二つに分割される。そして、そこで得た収入は、その参加したメンバーで均等に分ける。マザーズライフサポーターでは、この仕事の仕組みを「コラボワーク」と命名し、子どもを持つ女性たちの新たな就業形態を生み出すとともに、多くの女性たちの支持を受けている。このような託児付き仕事の斡旋サービスは、数年前までは介護施設や飲食店、工場からの依頼を受けていたが、現在は、主に農家の依頼を受けることが中心となっている。むしろ、nico laboに集まる母親たちには農作業を好む傾向が強いという。自然に触れていると季節を感じ、なんともいえぬ幸福感に包まれるそうだ。また、年間を通して仕事があるよりも、農繁期だけの仕事の方が、メリハリがあり楽しいという。また依頼をする農家側も外国人労働者(技能実習生)よりも、消費者であり口コミで広がりやすい母親たちに依頼したいという声が強くなっており、まさに両者の利益が一致している。そして、現在では(2016年度実績)、伊勢茶などを中心に生産する約40戸の農家と提携している²。

第5に、nico mama select (ニコママセレクト) といわれる三重県内の農家と直接提携して農産物の販売・PRを行っているものがある。母親たちは子どもに食べさせたいと思う、すなわち、母親自らがセレクトした良質な農産物(主に野菜が中心)を提携農家に引き取りに行き、さらにパロー³の特設コーナーで販売する仕組みである(写真1-9~10・参照)。もちろん、母親たちは、農家から引き取った野菜などをただ店頭でバーコードを張り付けながら並べているだけではない。自分たちが販売する野菜で作った料理の写真、レシピなどを店頭で並べる。野菜の価格は少々割高であるが、子どもたちと一緒に店頭で販売していると、年配のおばあちゃんたちが、子どもに話しかけながらその野菜を買ってくれるという⁴。また、店頭販売以外にも宅配サービスも行い、nico mama selectの年間利用者は2000人以上である。



写真1-9



写真1-10

第6に、nico mama PR（ニコママプロモーション）といわれる企業と提携した母親・子ども向け商品のモニタリング、マーケティング、商品開発の提案、ネットワークを活かした広報などを行っている。さらに、住宅のモデルハウスの集客向上のためのイベントを企画する仕事などがある。このような仕事は、企業からみれば、マザーズライフサポーターに参加する女性や子どもたちは、まさに情報の宝庫として受け止められている証にほかならない。言い換えれば、マザーズライフサポーターに依頼すれば、これまでとは異なる方法で市場調査が可能となり、母親や子どもの声を直接入手することができ、または、母親ならではの商品や企画が次々と生み出されるということである。すなわち、マザーズライフサポーターのメンバーの増大は、情報の集積・拡散を可能とし、その存在価値を高めることに繋がっているといえよう。

第7に、nico mama talk（ニコママトーク）といわれる子育てで悩んでいる人たちのための相談サービスがある。その方法は、LINEでマザーズライフサポーターにメッセージを送り相談する仕組みで、対応するスタッフも育児の真っただ中であるため、親身になって相談を受けることができる。さらに、言うまでもなく、相談を聞くだけではなく、上述したような諸活動への参加を提案するなどして、その解決策を明確に提示することが可能となっている。もちろん、あくまで相談内容、相手の置かれた状況、精神状況などの判断が求められるが、こうした相談業務はマザーズライフサポーターの面的な広がりを進めるための入口として機能していることは言うまでもない。

以上の7つの活動から明らかなように、その特徴として、マザーズライフサポーターの活動とは、母親たちはサービスを受ける側でもあり、希望をすればいつでもサービスを提供する側に回れるという点を指摘することができる。働きに出る時は子どもを預け、時には一緒に仕事をし、逆に、子どもと過ごしたいと思う時は、託児の役割を担えさえすれば、その希望を容易に叶えることができる。言い換えれば、母親と子どもが家庭という一つの空間で過ごすのではなく、社会とつながりを持ちながらともに生活することができる相互扶助システムといえよう。そして、そのシステムを母親自らが作り出している点にその特徴はある。



写真1-11 右から二人目が代表の伊藤理恵

第2章 女性たちの生活状況とマザーズライフサポーターの役割

本章では、2017年7月～10月（3回）、マザーズライフサポーターの立ち上げメンバーを含むコアメンバーに対するヒアリング調査、および2017年9月、マザーズライフサポーターがメンバーを対象に実施したアンケート調査結果を参考にし、女性たちの生活状況、家庭状況、「夫」との関係などについて、その実態を明らかにしたい。なお、アンケートの回答者は31人と決して多くはないが（登録メンバーの約1割程度）、日々、nico mama café（ニコママカフェ）に集い、または、nico mama talk（ニコママトーク）などで、女性たちに接しているコアメンバーによれば、「人数は少ないが、メンバー全体の特徴がかなり示されている」という意見に従い、このアンケート調査結果を利用して分析を進める。

まず、彼女たちの日常をみると、次のような点が指摘できる。

第1に、彼女たちの起床・就寝時間をみると（表2-1・参照）、6時前後に起きている人が多く、就寝時間（表2-2・参照）は23時前後であるため、1日の活動時間はおよそ17～18時間であろう。このうち、「自分だけの自由な時間」をみると（表2-3・参照）、2時間未満が全体の7割を占めていることから判断して、1日の大半を子育てと家事に専念している女性たちの姿が浮かび上がる。とくに、「平日（夫が休み以外）で子どもだけと過ごす時間は何時間か」という問いに対して（表2-4・参照）、大半は「4時間以上」としている。さらに、「自分だけ

表2-1 起床時間

5時前	1
5時から6時頃	13
6時から7時頃	12
7時から8時頃	2
8時以降	1
無回答	2
総計	31

表2-2 就寝時間

21時前	0
21時から22時	7
22時から23時	10
23時から24時頃	9
24時以降	3
無回答	2
総計	31

表2-3 自由に使える時間

30分未満	4
30分以上1時間未満	9
1時間以上2時間未満	9
2時間以上3時間未満	4
3時間以上	3
無回答	2
総計	31

表2-4 子どもと過ごす時間

1時間未満	1
4時間以上	30
総計	31

表2-5 自由時間の使い方

家で仕事をしている	4
1人で出かける	2
子どもと遊ぶ	8
友人と出かける	0
寝ている	4
ゲームをしている	2
その他	8
無回答	3
総数	31

表2-6 重要な目的

子育てに良い効果	12
社会とのつながり	5
新しい人間関係	10
収入を得る	1
その他	2
無回答	1
総計	31

表 2-7

子どもを育てる上での心配事は何か。

- ・子育ての方向性の違い（夫の両親）。
- ・ケガなどすることなく成長してくれるか。
- ・体が健康であること。
- ・病気。
- ・金銭面，安全面，教育面。
- ・金銭面。
- ・いじめとか。
- ・ちゃんと育てられるかな。（他1人）
- ・健康，事故。
- ・事故，非行。
- ・仕事に復帰してやっていけるかどうか。
- ・寝不足からのイライラで，子どもにつらく当たってしまわないか。
- ・優しい子に育てられるか。
- ・子どもの発達。
- ・イライラしてしまい，つい声を荒げたりして，子どもの性格に影響してしまうのではないか。
- ・初めてのことばかりでたくさん相談しています。泣いているときの対応。
- ・子どもに対する働きかけ。
- ・子育て支援や教育のこと。
- ・気軽に子どもを預ける場所がないこと。
- ・このまま育て続けていくときに孤立した環境の中で本当に不安しかない。
将来への不安も大きい。今は何とかなくても一人で抱えるには重すぎる。
- ・一人にさせてしまう時間ができること（就学後）。

の「自由な時間」の使い方をみると（表2-5・参照），約4割が「家事」と「子どもと遊ぶ」と回答している。そもそも「自由な時間」といえば，彼女たちが「母親」「妻」としてではなく，一人の人間としての状況，たとえば，スマホでゲームを楽しむとか，喫茶店でくつろぐなどのケースが多くみられるのかと推測したが，予想に反した回答が寄せられている。このような結果をみると，彼女たちのなかで「自由な時間」という考え方が，そもそも存在しないのではないかと疑いたくなるし，そこまで彼女たちが「気持ちの余裕を持ってない」ものなのかと考えざるを得ない。

第2に，彼女たちの余裕の欠落は，マザーズライフサポーターを利用する一つの要因を形成しているといえるが，彼女たちの参加目的をみると，必ずしもその解決に結びついているわけではないようだ。彼女たちは，参加目的として「子育てに良い効果があるため」と約4割が回答しており（表2-6・参照），自分のことは脇に置き，「母親」もしくは「妻」として子どもや家庭のことを考えていることが見て取れる。まさに上述したように彼女たちの余裕のなさが伝わってくるようでもある。そして，このような状況は，表2-7（「子どもを育てる上での心配事は何か」）で示されているような，「寝不足からのイライラで，子どもにつらく当たってしまわないか」，「イライラしてしまい，つい声を荒げたりして，子どもの性格に影響してしまうのではないか」，「このまま育て続けていくときに孤立した環境の中で本当に不安しかない」，「将来への不安も大きい。今は何とかなくても一人で抱えるには重すぎる」という焦りや不安を含む発言に結びついていくのであろう。

第3に，「子ども達を育てるときにもっとも重要な協力者は誰か」という質問をみると（表2

表 2-8 重要な協力者

夫	25
夫実家	2
自分の実家	2
近所	1
その他	0
無回答	1
総計	31

表 2-9 夫の家事

全くしない	11
30分程度	16
1時間程度	3
2時間程度	0
3時間以上	0
無回答	1
総計	31

表 2-10 悩みの相談相手

夫に相談	19
友人に相談	7
親戚に相談	1
専門家に相談	0
ネットに頼む	1
1人で考える	1
その他	0
無回答	2
総計	31

表 2-11 夫との会話

30分未満	8
30分以上1時間未満	9
1時間以上2時間未満	10
2時間以上3時間未満	1
3時間以上	2
無回答	1
総計	31

－8・参照), 約8割が「夫」と回答している。彼女たちが求める協力者とは、「夫」その人にはかならないのだ。しかし、「夫は一日どのくらい家事をしますか」という問いに対して一番多かった答えは(表2-9・参照)、「全くしない」が11人、「30分程度」が16人で、両者を合わせると約9割を占め、彼女たちが求める協力になかなか応えられていない「夫」の姿が浮かぶ。また、「悩みの相談相手」としては(表2-10・参照)、半数以上が「夫」と回答しており、精神的な拠り所でもあることに違いはないのだが、「夫」との「1日の会話」の時間をみると(表2-11・参照)、「30分未満」が8人、「30分以上1時間未満」が9人と、彼女たちの悩みを打ち明けるための時間が十分に用意されているわけではない。このような「夫」の不在という状況から明らかのように、家事や子育てが彼女たちだけに負わされ、焦りや不安がその内部に蓄積していくことになると推測することは決して難しくはない。それゆえ、表2-12(「夫に対する要求」)で示されているように、「家事も育児も仕事も頑張ってくれているので、無理をしないで欲しい」、「現状で満足」という「夫」に対する肯定派は少数派であり、「家事を手伝って欲しい」、「子育てを積極的にかかわって欲しい」という要求が強くみられる。さらに、「子どもを見て欲しいとは思わないが、私をねぎらって欲しい」、「癒して欲しい」、「一人の個人として考えてほしい。母・妻でない存在を考えて欲しい」と、半ば「夫」の協力を諦めた胸中を発露しつつも、せめて寄り添って欲しいという声すらある。

このようなマザーズライフサポーターに参加する女性たちの状況を、代表の伊藤は、自身の経験に照らし合わせながら、「孤立」という言葉で捉える。そして、この「孤立」から焦りや不安が増大していくことになるのだという。また、こうした状況とは、鈴鹿市で生活する女性たちの問題ではなく、日本のどこにでもある「ありふれた風景」であるとする。確かに、上述した彼

表 2 - 12

「夫」に対する要求.

<ul style="list-style-type: none"> ・家事の協力. (他 2 人) ・子どもとの時間 (育児). (他 3 人) ・子どもと積極的に関わること. ・一緒に子育てをするということ. 子どもと二人きりの時の大変さを理解. ・子どもとの時間を大切にしてほしい. ・自主的な子育て. ・休日の子育て協力. ・家のこと, 育児を少しでも手伝ってほしい. 忙しいのはわかるけど…. ・いやし. ・子どもを見てほしいとは思わないが, 私をねぎらってほしい. ・心に寄り添って話をきいてくれる. 育児への参画. 一人の時間を作ってくれる. ・仕事や家事・育児以外の自分時間を持つことに理解・協力をしてほしい. ・本人の健康管理. ・家族をまとめる存在. ・仕事と少しでもいいので家事の両立. ・一人の個人として考えてほしい. 母・妻でない存在を考えてほしい. ・積極性.

満足点

<ul style="list-style-type: none"> ・家事も育児も仕事も頑張ってくれているので, 無理をしないでほしい. ・現状で満足. ・とくになし. (他 2 人)
--

女たちの姿は, 世間ではよく聞く話でもある. 実際, 私の周りでも家事と子育てに埋没し, たまに会えば「夫」の愚痴を言い続ける友人は少なくない. それゆえ, マザーズライフサポーターが, 短期間で多くの女性たちの支持を受けたという事実は非常に納得できるし, 上述したような諸活動とは, まさに悩める女性たちの需要に「ピタリとはまった」といえよう. たとえば, 「マザーズライフサポーターの活動で最も必要としている活動とは」という問いに対し

表 2 - 13 必要とする活動

ニコママフリーペーパー	13
スマイル	2
ニコラボ	1
セレクト	0
プロモーション	1
トーク	0
無回答	14
総 計	31

て (表 2 - 13・参照), 彼女たちの多くは, ニコママフリーペーパーの作成と答えているのだが, それは, ニコママフリーペーパーでマザーズライフサポーターに出会い, 同じ悩みをもつ仲間に出会うことを通して救われたのであろう. 自分と同じように悩む「妻」たちが「救われる」, 「救うべきだ」という思いが込められた結果ともいえよう. しかし, 女性たちの需要に応えることは重要なことであるが, それは対処療法の域を出ることはない. マザーズライフサポーターの役割とは, 対処療法を次から次へと打ち出していくことだけで十分といえるのだろうか. 以下, マザーズライフサポーターの役割についての考察を進めたい.

代表の伊藤は, マザーズライフサポーターの存在意義を伝えたいとき, 次のようなたとえ話をしばしば引き合いに出すという.

“大切な出張の日の朝、急に子どもが発熱。よくある場面だと思います。私達母親は悩みます。そこに、助けてくれる人がいたら、出張に行きたいのです。しかし、保育所は発熱では預かってくれないし、病児保育を手配していたら、とても時間に間に合わない。やむなく「職場社会」を断念して「家族社会」を優先するという選択をするのです。”

上述したように協力者（とくに「夫」）の不在のなかで、「家族」を選択することは必然的であろう。もちろん、なぜ、女性だけがこの選択に迫られるのか、むしろどうして男性（「夫」）はこの選択から解放されているのか、という問いを投げかけることもできるし、たとえ発熱しても「保育所」で預かってもらえるような設備を整えることを嘆願し、または病児保育の手続きの簡略を求めていくなど、マザーズライフサポーターの役割は無限に広がるようでもある。しかし、伊藤たちが始めた諸活動とは、上述した問題提起に対して、それは「仕事」も「育児」も両方成立することができる道を指し示すことであった。すなわち、マザーズライフサポーターに参加する女性たちは、マザーズライフサポーターに子どもを預け、仕事に出かけることができるシステムを提示したことにほかならない。もっとも、このシステムは、上述したように対処療法のなかから生まれてきた一つの道でもあるが、第三の道を明確に示したマザーズライフサポーターの社会的意義は非常に大きいといえよう。ただし、いくつかの問題も残る。

女性たちが、マザーズライフサポーターで諸活動や仕事に参加することによって社会とかかわりを持つということは、少なくとも「子ども」の問題をこれまでとは異なる方法で解決したことは間違いない。「子ども」を受け入れてくれる保育所を探す必要はないし、「子どもを保育所に預けてまで」、または「保育所で寂しい思いをさせてまで」社会と繋がりを持つ「必要があるのか？」という非難を受けることはない。しかし、「夫」からみれば、「子ども」の問題が解決したからといって、「妻」が、「仕事」か「家族」の選択をする必要がどこにあるのか、という疑問が解消したわけではない。すなわち、「妻」が「仕事」をする意味を「夫」は理解できないという問題が横たわっているのだ。事実、マザーズライフサポーターの事務所には日々、「夫」たちの苦情が寄せられているし、ニコママカフェで怒鳴り散らす「夫」も少なくないという。伊藤は、週に数回、ニコママカフェに押しかけてくる「夫」たちの対応に追われている⁵。確かに、このような実態を聞けば、上述した原田と同じくそのような苦情を呈す「夫」には「小さいね」と言い放ちたくなるであろう。しかし、もしもそのようなことを本当に言ってしまうと、女性たちに「仕事」か「家庭」かの選択を迫ることになり、その選択の先には、「離婚」という文字が浮かぶ。「離婚」、すなわち「家庭」が崩壊するようなことになれば、マザーズライフサポーターの役割そのものが問われかねない。つまり、マザーズライフサポーターが、これまでにはないシステムを構築し、女性の社会進出を後押ししている点は高く評価できるが、次のステップとして、「夫」も「妻」もともに社会とかかわり、その上で、お互いに理解しあい、さらに子どもにとってもより良い環境が整うような円満で幸福な「家庭」を構築していくための役割が求められているのではないだろうか。

では、現在、マザーズライフサポーターは何をすべきであるのか。「夫」に対して根気強く理

表 2-14 夫の休日の過ごし方

仕事をする	3
1人で出かける	1
子どもと遊ぶ	22
友人と出かける	2
寝ている	1
ゲームをしている	2
その他	0
無回答	0
総計	31

表 2-15 外食回数

ほぼ毎日	0
週に数回	2
月に数回	17
年に数回	3
全くない	1
無回答	8
総計	31

表 2-16 家族旅行

年に数回	11
月に数回	8
ほとんどしたことがない	3
その他	1
無回答	8
総計	31

表 2-17 生活費

5万円未満	4
5万以上10万未満	6
10万以上15万未満	9
15万以上20万未満	6
20万以上	6
総計	31

解を求めることは重要な作業であろう。しかし、「夫」に対して一方的に女性の、「妻」の社会進出に「理解を示せ」と繰り返し説得を試みたとしても、それは徒労に終わるだけではないかと思えてならない。むしろその前に、「夫」そのものを理解すべきではなからうか。今回の調査では、直接、「夫」に対するヒアリングやアンケート調査を行うことはできなかったが、女性たちに対するアンケート調査結果から「夫」たちの実態をみると、主に次のような特徴が指摘できる。

第1に、「夫」の休日の過ごし方をみると（表2-14・参照）、「子どもと一緒に遊ぶ」が全体の約7割を占めている。また、家族全員での外食をみると（表2-15・参照）、約6割は「週に数回」「月に数回」と答え、さらに、「家族旅行」も（表2-16・参照）、「年に数回」と「月に数回」を合わせれば半数以上を占めている。確かに、平日は仕事に埋没し、なかなか家事や子育てを手伝うことはできないのだろうが、休日は、家族サービスに励む「頑張っている夫」の姿を見出すことができる。

第2に、「毎月夫から生活費をいくらもらっているか」という問いをみると（表2-17・参照）、「10万円以上15万未満」が9人、「15万以上20万円未満」が6人、「20万円以上」が6人と、家庭に収める額は決して小さくないであろうし、自分のお小遣いを切り詰めながらも、家族のために「我慢している夫」の姿が浮かぶ。

第3に、平日の「夫」たちの起床・帰宅・就寝時間をみると（表2-18、表2-19、表2-20・参照）、約8割は朝7時前に起床し、約5割強は20時までに帰宅し、約7割は22時から24時までに就寝している。このような状況をみれば、「夫」たちは朝早くから仕事に出かけ、仕事が終われば早々に帰宅し、できる限り家事や子育てを手伝い、そして明日の仕事に備えて早めに床に就くという生活状況が浮かぶ。まさに規則正しい生活にほかならないのだが、そのなかで、彼ら自身の時間はどこにあるのだろうか。休日は子育てに専念し、どこでのんびりすることができるのだろうか、またはいつ遊んでいるのだろうかと思えてならない。半ばルーティン化された

表 2 - 18 夫の起床時間

5時前	1
5時から6時	7
6時から7時	17
7時から8時	2
8時以降	3
無回答	1
総計	31

表 2 - 19 夫の帰宅時間

18時前	4
18時から20時	13
20時から22時	8
22時以降	4
不定期	1
無回答	1
総計	31

表 2 - 20 夫の就寝時間

21時前	0
21時から22時	3
22時から23時	10
23時から24時	12
24時以降	4
無回答	2
総計	31

生活の中で、時間に追われた「余裕のない夫」を容易に発見することができる。

もっとも、このような「頑張っている夫」、「我慢している夫」、「余裕のない夫」という特徴とは、決して目新しい「夫」像ではない。しかし、これらの言葉をつなぎ合わせると、その背後には「孤立」という言葉が隠れているような気がしてならない。もちろん、「夫」たちは、仕事の仲間たちや旧知の友人たちと飲み会を開き、外出することもあるだろう。しかし、彼らの生活状況をみれば、金銭面、時間面において限りがあることはいうまでもない。むしろ日々の家庭サービスを優先するなかで、「夫」たちの人間関係は固定化され、さらに縮小すらしているのではないのか。まさに「夫」も、「妻」と同じように、この社会のなかで「孤立」しているのではないだろうか。そして、こうした「孤立」を「妻」たちはどこまで理解することができているのか、と疑問を抱かざるを得ないし、「妻」の「孤立」を解消するだけでなく、「夫」の「孤立」も解消することが、マザーズライフサポーターの役割ではないだろうか。少なくともこの両者が抱える「孤立」に対峙しなければ、「家庭」を維持しながらの女性たちの社会進出は頓挫してしまう危険を絶えず孕むことになってしまうであろう。

次章では、このような「孤立」の問題を含め、「包」の視点からマザーズライフサポーターの諸活動、とくに仕事の仕組みについて分析を進めたい。

第3章 「包」の視点からみたマザーズライフサポーター

「包」とは、1940年代の中国で、柏祐賢によって発見された一つの経済システムである（柏祐賢 1986）。柏は、この「包」というシステムに基づき中国経済の停滞要因を見事に描き出す。しかし、1949年、中国革命による社会主義国家成立の熱狂のなかで柏の停滞論、「包」は歴史のなかに埋没してしまう。その後、21世紀を迎えた中国において「包」のシステムは、加藤弘之によって再発見され、再び「包」は脚光を浴び始める。加藤は70年以上もの時間が経過した中国社会のなかに、「包」が今なお経済活動に大きな影響を与えている事実をつかみ取り、さらに、この「包」から着想を得て、「曖昧な制度」という一つの問題を導き、中国経済の発展要因を描き出す（加藤弘之 2009, 2013, 2016）。このように「包」とは、中国の激動の時代を潜り抜け、依然として中国経済・社会を読み解くうえで重要なキーワードであり続けていることに間違いな

いのだが、停滞論、発展論という真逆な結論を、あるいは異なる経済状態を導き出すという少々ミステリアスな側面を内包したシステムであるといえよう。

ただし、このミステリアスな側面についての分析は別稿に譲り（原田忠直 2017）、本章では、まず、「包」のシステムを簡単に述べ、その後、柏の停滞論および加藤の発展論の分析を進め、「包」の諸特徴を明らかにしたい。

まず、「包」を簡単に説明することから始めたい。写真3-1は立体的に描いた「包」の構造である。写真に写る球体は「人」を表している。そして、これら「人」のなかで、「出包者」と記されている「人」が、契約を提示する者、あるいは投資者にほかならず、「包」の構造の中心をなす。そして、その「出包者」から繋がっているのが、「承包者」であり、契約を請負う者、あるいは経営者である。さらに、その「承包者」から第2、第3への「承包者」へと繋がり、1人の「出包者」から無数の人びとが繋がり「人と人」の関係が広がっていることが示されている。もっとも、このような「人と人」の結びつきだけで、「包」の構造を理解することはできない。少なくとも写真3-1は、ただ「請負いの構造」を表現しているだけに過ぎず、そうした構造であれば、中国に限らず、「下請け」、「系列」などと呼び方は異なるが、どの国においても見出すことは可能である。ところが、「包」のシステムを詳細に分析すれば、どの国でも散見できる「下請け」とは大きく異なる実態が浮かび上がる。以下、柏と加藤が、この構造から読み取ったそれぞれの論点を中心に、その特徴をみてみたい。

柏は、この「包」のシステムによって停滞論を導き出すのであるが、その要因として、①「出包者」を起点として、第1、第2、第3の「承包者」へと人びとが繋がっていくことは、仕事を他者に請け負わせているだけに過ぎず、第1、第2の「承包者」の自己努力の欠如があるとする。つまり、写真3-1であらわされる人びとは、他人任せの集合体であり、寝る間を惜しんで技術革新を目指すわけではなく、そうした状況の下で経済の停滞は避けられないとする。②人びとの集合体とは、一つの仕事に多くの人間が群れ集まることにほかならない。言い換えれば、それ

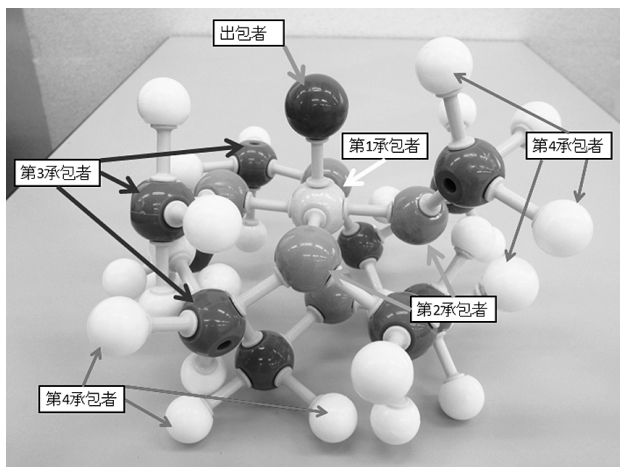


写真3-1

は少ない利益が群れた人びとによって分配されることを意味し、資本はどこにも蓄積されない状況を生み出すことになる。そして、結果として、拡大再生産は難しくなり経済は停滞すると結論付ける。この2点が主な停滞論の要因であるが、柏は「包」システムの下で、経済は停滞するが、利潤の独占化が忌避され、すなわち、より多くの人びとが仕事に就き収入を得る機会を獲得することによって、社会は安定すると「包」に基づく中国社会の特徴を明らかにする。

このような停滞論に対して、加藤は、写真3-1の「人」と「人」の関係性に着眼し、そこに「対等性・水平性」の関係を見出す。すなわち、「人」と「人」は上下関係で結ばれているわけではなく、「出包者」と第1の「承包者」、第1の「承包者」と第2の「承包者」とは、必ずしも上司と部下ではなく、そこに命令系統がないことを明らかにする。言い換えれば、「仕事は依頼するが、口は出さない」ということであり、「承包者」の自由な裁量権が強固に堅持されているとする。そして、この自由こそが、人びとのモチベーションを高め、経済発展の原動力の一つであると結論つける。いうまでもなく、こうした関係性とはまさに日本にみられる「下請け構造」とは大きく異なり、「包」システムの大きな特徴といえよう。

少々大まかではあるが、これらが柏と加藤が指摘する「包」の特徴である。しかし、「包」のシステムを把握するためには、もう少し踏み込む必要がある（原田忠直 2011, 2014, 2016, 2017）。それは、「包」のシステムは、スクラップアンドビルドを繰り返すということである⁶。すなわち、写真3-1の構造は、一定の時間が経過すれば（たとえば契約期間が満了すれば）、すべてを「無に帰す」という特徴を有している。もちろん、たとえ経済活動が上手く営まれる「包」があったとしても、それは時間の経緯とともにスクラップされる。むしろ「包」のシステムは、スクラップされなければ、上述した柏が指摘した「社会の安定」、加藤がいう人間関係の「対等性・水平性」を維持することは不可能ともいえる。

「社会の安定」とスクラップアンドビルドについていえば、もし写真3-1の「人」と「人」との関係性が固定化されたならば、この構造の外側にいる人びと、たとえば失業者にはなかなか就業機会のチャンスが巡ってこなくなってしまうであろう。ところが、スクラップアンドビルドされることによって、より多くの人びとは職を得る可能性が生まれ、「社会の安定」が達成されることになる。また、「対等性・水平性」とスクラップアンドビルドについていえば、スクラップアンドビルドされず、いつも同じ顔触れの関係性が維持されれば、そこには、いつしか上下関係が生まれてしまうであろう。そして、自由は、その手から零れ落ちることになってしまう。さらに、人間関係が固定化されないということは、新しい人間関係が絶えず形成され続けることを意味する。スクラップアンドビルドのたびに、新たな出会いが待っているといっても言い過ぎではない。ただし、スクラップとは、すべての終りを意味しない。中国で「包」のシステムの下で経済活動を営む人びとにヒアリングを行っているとき、スクラップ後、「友情」が生まれることもしばしばあるという。実際、私の知人・友人たちをみると、「包」の関係が終わったのちも、連絡を取り合い、「友情」を育んでいるケースが少なくない。逆説的ではあるが、「包」の関係性において、「対等性・水平性」の人間関係があるからこそ、「友情」が成立するのであろう。

以上、中国の「包」について紹介してきたが、この「包」の特徴を整理すれば、「包」的営みとは、スクラップアンドビルドが繰り返されることによって、より多くの人びとに就業機会を与え、そして、ひとたびこの構造に加われば、自由裁量権が与えられるとともに、人間関係は広がり、ときに友情もが育まれることにもなる。まさにお金、自由、友情といった、人生において必要不可欠なものを与えてくれる贅沢なシステムでもあるといえよう。

さて、こうした「包」的な営みの視点からマザーズライフサポーターの諸活動、とくに、ニコラボ（コラボワーク）やニコママセレクトなどの経済活動をみると、そこには多くの類似性を発見することが可能である。ここでは、伊勢茶の作業のケースを例にとり、詳細にみていきたい。

このケースにおいて、伊勢茶を栽培する農家は、「包」のシステムに当てはめれば、「出包者」であり、マザーズライフサポーターは、第1の「承包者」、実際の農作業を行い、また、子どもを見守る女性たちは、第2の「承包者」といえよう。そして、図1から図3は、実際の作業に携わる女性たちの動きを表現している。図1は、マザーズライフサポーターに参加している女性たちであり、①から⑫の番号はそれぞれの女性を表している（ここでは便宜上12人の女性たちを想定する）。そして、伊勢茶の栽培農家から仕事の依頼がマザーズライフサポーターに入り、メンバーに声をかける。農家が必要とする作業者は3人であり、図2で示されているように②番、⑤番、⑦番の女性たちが手を挙げ、農家に向かうことになる。ただし、マザーズライフサポーターでは、この3名のほかに、子どもを見守る係としてそのメンバーも募る。そして、④番、⑩番、⑫番の女性たちが、②番の2人の子ども、⑤番の1人の子ども、⑦番の1人の子ども、さらに自分たちの子どもたち5名を加え、合計9名の子どもたちの子守の仕事に就く。つまり、本来であれば、農家のリクエストは3名であるが、マザーズライフサポーターはその倍の6名で行うこと

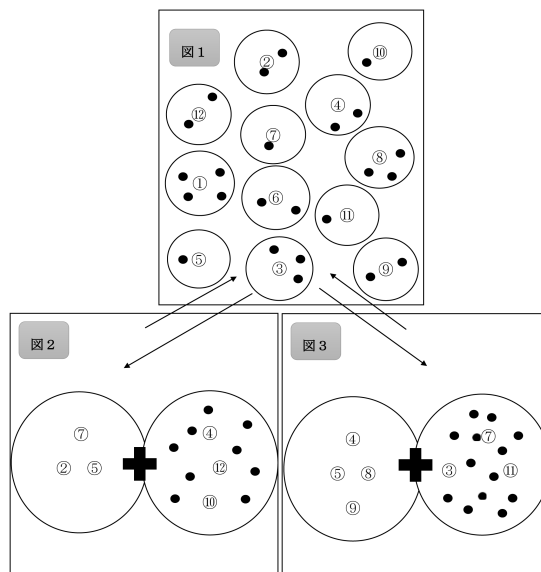


図1～3 筆者作成（川村）

になる。そして、3名分の給与（マザーズライフサポーターは一定の紹介料を差し引いた額である）を6名で平等に分配する。このような方法は、経済的合理性が追求されているとはいえないし、「包」的営みと同じく、一つの仕事に多くの人びとが群れている状況と大きな違いはない。しかし、柏がいう「社会の安定」が計られるというほど大げさなものではないが、とりわけ資本がどこかに蓄積されることはないし、女性たちが受け取る収入が少なくなったとしてもメンバーが納得しているのであれば、大きな問題にはならないであろう。

さらに、図2のメンバーは決して固定化されるわけではない。図2のメンバーは契約期間が終了すれば、あるいは契約中であっても日によって参加するメンバーは入れ替わることもあるという。そして、図3で示されたように異なるメンバーがその作業を行うことになる。いうまでもなく、これは「包」的営みと同じくスクラップアンドビルドにほかならない。もちろん、第1の「承包者」であるマザーズライフサポーターは固定されているため、完全なるスクラップアンドビルドとはいえない難い面もあるが、少なくとも現場のメンバーが入れ替わることは、女性たちの間には絶えず新鮮な風が流れ、誰に命令されるわけでもなく、対等で水平な関係性が築かれる可能性を秘めているといえるであろう。そして、人間関係は日々広がり、その過程で、心を許して悩みを打ち明けられる気の合う友人を発見する可能性も高まるであろう。

このように「包」の視点からマザーズライフサポーターの経済活動を読み解いていくと、そこに類似性を発見することは容易である。さらに、「包」的営みは、彼女たちの「需要」にマッチしているだけでなく、人間関係の広がりには予想以上の成果に繋がっていくのではないかとすら思える。もっとも、こうしたマザーズライフサポーターの試みはまだ始まったばかりであり、根付いていくのかどうか定かではない。しかし、女性が社会に進出する方法として、「包」的営みと類似性をもつマザーズライフサポーターの諸活動は、新たな視点を提供するものであるといえよう。

ただし、マザーズライフサポーターの領域は、いうまでもなく女性を対象としたものであり、前章で川村が提起した「夫」の「孤立」問題を合わせて考えると、まだまだ乗り越えなくてはならない幾重もの壁が前途を遮っているようでもある。「夫」たちは、「今日は農作業」、「明日は子守の仕事」、「明後日は農産物の販売」、「今度の土曜日はフリーペーパーの取材」、「日曜日は住宅展示場でイベントの仕事」などと目まぐるしく変化する「妻」たちの仕事を理解することができるのだろうか。いうまでもなく「包」的営みとは、「夫」たちの仕事の方法とは真逆のようなシステムである可能性は高い。また、「妻」たちが、仕事をするたびに広がっていく人間関係、仕事の話をするごとに新たな仲間の名前が飛び出してくる「妻」に嫉妬すら覚えるのではないだろうか。「夫」たちは、理解することが可能なのか。何か妙案はあるのだろうか。最後にこの点に触れ、本稿を閉じたい。

おわりに

中国研究家の村松祐次は、中国経済・社会を解明するための重要な視点を次のようにまとめる。すなわち、“中国経済全体を競技に例えれば、「経済事象とはスコアであり」、「個々の経済主体を制約する社会的な規範は、中国経済に特有な「競技規則（ルール）」といえよう”（村松祐次 1949）。また、開発経済学者の原洋之介は、“多様な国・地域の異なる経済パフォーマンスを解明するためには、制度、経済システムの中に埋め込まれているインセンティブ構造を見きわめる必要がある”と説明する（原洋之介 1996）。このような村松、原のいずれの視点も外国研究、地域研究を念頭に入れたものであるが、本稿で取り上げた「妻」の経済活動に対して「夫」がなかなか理解できない要因をみる上でも、彼らの視点は、参考になるのではないだろうか。たとえば、「妻」と「夫」は、それぞれ異なるスポーツのルールに従っているとすれば、両者の違いは鮮明に浮かび上がる。たとえば、「妻」はサッカーのルールに、「夫」は野球のルールに従っているとすれば、家庭内のルール作りはなかなか上手くいかないであろう。最後には暴力的な方法が選ばれてしまう危険すらある。さらに、両者がそれぞれのスポーツの楽しみを伝えようとしても、ルールを理解できなければ、話は平行線のままであろう。とくに「夫」は頑なまでに野球の方が楽しいと思いつけているのではないだろうか。「野球の方が日本社会に昔から溶け込んでいるし、サッカーは海外で人気があるだけではないか」という声が聞こえてくるようでもある。さらに、プレイをするためのインセンティブも大きく異なる。「妻」はとりわけその道のプロを目指しているわけではなく、素人でも構わないし、何よりも子どもと一緒に仕事ができれば十分であると考えているのではないか。しかし、「夫」は、その道に入ればプロを目指すのが当たり前で、そのために努力すること、それが家族の幸せにほかならないと考えているのではないか。

このように両者の溝は決して浅くはない。しかし、この溝を埋めなければ、「妻」も「夫」もそれぞれが「孤立」するであろうし、そもそも「家庭」の意味が根本から問われかねない。もちろん、各家族の問題に、他者が容易に踏み込むべきではないかもしれないが、すでに「妻」を対象に諸活動を展開するマザーズライフサポーターにとって、関わらなければならない領域でもあるといえよう。

そのために何をすべきか？

「夫」たちを諸活動に巻き込んでいくことも一つの方法であろう。もっとも、「夫」たちが、マザーズライフサポーターが主催するイベントに参加しても、彼らは女性たちの輪のなかに溶け込むことはできず、また、ほかの「夫」たちと輪を作ることもできず、女性たちの輪の外側で等間隔に佇むことしかできないであろう。しかし、そのような「夫」たちの絶望的ともいえる姿にひるむことなく、継続していくことが大切であろう。もちろん、「夫」を巻き込みながらの諸活動の成果を上げることは簡単ではない。上述したように異なる「ルール」が交じり合い新たな「ルール」を作り上げることは困難極まりない。しかし、懲りずに活動を続けていけば、各家庭

のなかで一つの問題提起,あるいは小さな波が引き起こされるのではないか。「妻」と「夫」が、テーブルをはさんで語り合う時間を提供することになるのではないだろうか。当然、言い争いになることもあるだろうが、そうした話し合いを通じて、各家庭の独自の新しい「ルール」、または規範のようなものが形成されるとすれば、希望の光が灯り出すことになる。そして、そのような時間を作ることをサポートしていくこと、それが、マザーズライフサポーターの役割ではないか。少なくともマザーズだけではなく、ファミリーを念頭に置いた活動が必要であろう。上述したように女性が社会へ進出するために役所に保育園の新設やら増員を訴えるなど大上段に構え、社会の「ルール」を書き換えるよりも、それぞれの家庭のルールに変更を加えていくことが、マザーズライフサポーターの使命ではなかろうか。とくに「包」的営みと類似性を持つマザーズライフサポーターの諸活動は、既存の価値観、なかでも労働観の違いによって、各家庭に大きなインパクトを与える可能性は高い。今後、マザーズライフサポーターの諸活動を通して、食卓のテーブルは揺れ続け、「包」的営みが、すなわち、ただお金を手にするだけではなく、自由、新しい人間関係、そして友情が生まれるような仕事の存在が、「夫」に伝わり始めれば、新たな社会が生まれてくる予感を感じざるを得ないし、マザーズライフサポーターの未来に期待せずにはいられない、というのが中国を研究対象とする私たちの強い願いでもある。

註

- 1 この張り紙は、2017年11月、川村が名古屋市内のあるお店の店頭に掲げてあるのを発見し、写真に収めたものである。
- 2 この活動は2017年1月28日付けの“日本農業新聞”にも紹介されている。
- 3 パローは岐阜県多治見市に本部を置くスーパーマーケットである。岐阜、愛知を中心に214店を展開している(2017年6月現在)。なお、三重県には8店が営業している。
- 4 現在、このコーナーはパローにしかないようであるが、11月に開店するベルシティでも8畳ほどのコーナーが設けられることが決まっている。また、手作りで作成され、飾られている家庭での写真は、docomoがクラウドサービスを始めるといふ。これまでは、頑張ってポップを作成したとしても、作成している間に並べている野菜が変わってしまうということが多々あった。そのため、クラウドサービスが始まることで現在並べられている野菜を旬に紹介することが可能となり、この活動が今後、大きく飛躍していくことが期待されている。
- 5 なぜ「夫」は怒鳴り散らすのだろうか。ここでは、「夫」たちの苦情や怒りを一身に浴びている伊藤の見解を示しておきたい。あくまでも個人的な見解と前置きして、伊藤は次のように語る。「私たち母親は、いかに時間をかけずに家事の生産性を高めることをいつも考えています(たとえば、洗濯物を早く干し、掃除を早くし、食事を素早く作るなど)、しかし、夫はそこにどれだけの時間をかけるか、費やす時間が多ければ多いほど、愛情が深まると錯覚しているのではないのでしょうか。この錯覚には、日本の雇用形態と密接な関係があると思えてなりません。夫たちは長時間労働こそが、働く者の鏡だと頭に刷り込まれているのではないのでしょうか。時間をかければかけるほど、より良いものができるのだと信じているのではないのでしょうか。しっかり調査したわけではないのですが、苦情を呈し怒鳴る夫たちの多くは、工場勤務の方が多いようです。逆に、営業職や自営の方には、多少は理解されているように感じます。もちろん、あくまで私の主観ですから、はっきりしない点は多々ありますが…」と。このような伊藤の見解をヒントとすれば、今後は、「夫」たちの就業状況を中心にヒアリング・アンケート調査を実施し、なぜ夫は怒鳴るのか、この問題の解明に努めたい。

- 6 なぜ、「包」のシステムはスクラップアンドビルドされるのか？この問いの答えは別稿を参照していただきたいのだが、以下、少しでも「包」についての理解を深めるため、中部産業新聞に掲載された記事（2017年12月12日）を参考資料として転写しておく。

「生意」の真意とは？——スクラップアンドビルドの先にあるもの——

中国語の「生意」は、日本語では「商売」と訳される。日々、中国人と接していると、「将来、社長になってお金持ちになりたい」という強い希望をしばしば耳にする。それゆえ、「生意」の大意を「商売」とは生きる意味にほかならない」と解釈したくなる。また、私がこれまで中国で実施したアンケート調査では、学生（中学生から大学生）、企業の従業員、さらに年齢や性別にかかわらず7～8割が、「将来、商売を始めたい」と答える。このような実態を前にすれば、なるほど、商売を始めることは、中国人にとって大きな人生目標であり、まさに生きる意味そのものであると確信すら生まれてくる。しかし、この訳は正解ではない。「生意」の解釈としては、諸説あるようだが、おおむね「商売とはいつも生（なま）の人間、すなわち新鮮な人間関係を絶えず維持しながら行うものである」というのが正しいといわれる。逆に、「いつも同じ顔触れ、熟した人間関係のもとで商売を続けていると上手いかなくなる」ということであろう。つまり、「生意」とは、熟した人間関係のなかで、長期的な利益、安定・安心・安全を求めるのではなく、短期的で、安定・安心・安全とは無縁な状態をあえて作り出すという意味が含まれている。ただ、このように言われてもなかなか理解することは難しい。なぜ、利益が生まれていたとしても、人間関係のスクラップアンドビルドを行う必要があるのか。どうして熟した人間関係、信頼関係を構築しようとはしないのか。このような疑問が浮かんでも不思議ではない。ところが、新鮮な人間関係を維持する「生意」にはそれなりの意味がある。たとえば、スクラップアンドビルドを繰り返すことによって、人間関係の輪は決して固定化されず、どこまでも広がっていくことになる。また、参入障壁を低くすることにより多くの人々にチャンスが巡ってくる可能性は高くなる。さらに、経済活動における「自由な裁量権の領域」が維持されることになる。とくに、この「自由」な概念がもっとも重要な点ではないかと思っている。もとより商売とは、誰かに命令され、指図を受けたりせず、自らの裁量権＝「自由」が確保されていることが大きな魅力といえよう。そして、裁量権を保ち続けるためには、絶えず対等な人間関係が築かれる必要がある。逆に、熟した人間関係が続くと自然と上下関係が形成され、「自由の領域」に代わって「今回はちょっと辛抱して」という言葉が幅を利かせてくるであろう。このように「生意」の根底には、「お金持ちになる」と同時に、経済活動における「自由」の獲得が目指されている。もっとも、「生意」の概念が、現在の中国経済にどのくらい反映しているのか定かではない。しかし、「お金」と「自由」を同時に獲得できるとすれば、それは随分と贅沢なものであり、人々がこの目標を抱くことが、中国経済の成長の一つの要因ではないか、と推測することはそれほど間違いではないように思えてならない。

参考文献

- 柏祐賢（1986）『経済秩序個性論Ⅱ』（柏祐賢著作集第4巻、京都産業大学出版会）
 加藤弘之（2009）加藤弘之・久保亨著『進化する中国の資本主義』（岩波書店）
 加藤弘之（2013）『「曖昧な制度」としての中国型資本主義』（NTT出版）
 加藤弘之（2016）『中国経済学入門——「曖昧な制度」はいかに機能しているか——』（名古屋大学出版会）
 原洋之介（1996）『開発経済論』（岩波書店）
 原田忠直（2011）「中国におけるセーフティ・ネット形成と「包」の倫理規律」（『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第123号、日本福祉大学福祉社会開発研究所、2011年）
 原田忠直（2014）「『現代中国における「包」と「発展のシェーマ』についての一考察』（『中国社会の基層変化と日中関係の変容』（愛知大学国際中国学研究センター編、2014年）
 原田忠直（2016）「農民工からみた中国社会——ある一枚の写真から読み解く中国社会」（『中国21』44号、愛知大学現代中国学会編、東方書店、2016年）
 原田忠直（2017）「『包』の「特殊性」から読み解く「中国経済のシェーマ」——柏祐賢と加藤弘之が探し

求めた中国研究の核心——」(その一) (ICCS 現代中国学ジャーナル 第10巻, 第1号 国際中国学研究センター)
村松祐次 (1949) 『中国経済の社会態制』 (東洋経済新報社)